婦人と新社會

山田わか主筆

十月號

每月一回一日發行　第參拾貳號　大正十一年十月一日發行

東京[illegible]婦人と新社會[illegible]發行

日本人ニ適當ナル獨乙製裁縫用ミシン

一家庭用蓋付手ミシン　金六十五圓也

一同蓋ナシミシン　金六十二圓五十錢也

一同蓋付足踏ミシン　金九十圓也

一同足踏ミシン　金八十五圓也



東京神田區須田町

日本商店

一手販賣店

電話神田三二四番　振替口座東京一一三九八番

婦人と新社會

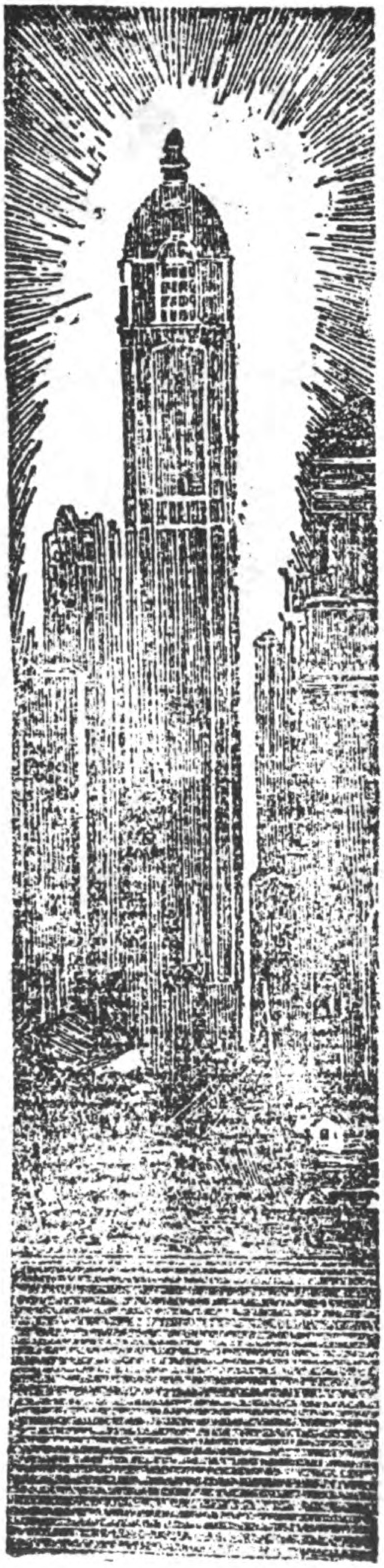
十月號

男が見た女

婦人に關しての男子の判斷は、多くの場合ひ、冷靜な科學的觀察の結果ではない。

男子自身の性的情緒と云ふ色眼鏡、及び、性的衝動に對する男子自身の道德的態度と云ふ色眼鏡をかけて男子は婦人を見る。

であるから、性的動物としての婦人に關する男子の書いたものは、婦人其のものを說明したと云ふよりは、むしろ、男子自身の相像が勝手に造り上げた人間に付いて書かれてあるのである。(エリス)



物價調節の鍵

――政府と主婦の連絡

物價調節と云ふことは少くとも今は國家的の問題になつてゐます。國家をあげて何とか此の問題を解決しなければならぬ處迄、云ひ直せば政府が國民の日常生活に直接交渉しなければならぬ處迄、時の流れは進んで來てゐます。私は度々云つて置きました。社會上のあらゆる事業は家庭を補助するものである。殊に、産業は各家庭で消費

する物品を產出するのが目的であるからして、各家庭の主婦の頭の動かし方によつて產業界を支配する事が出來る。たとへば獸肉が法外に高價であると云ふことが告げられるならば、各家庭で料理に獸肉を使ふことをやめる。絹物が拂底で馬鹿に價が上がつたと云ふことを知るならば絹物を買ふことを暫くやめる。すると其れ等の物品の値段は下落せずには居ない。そして、凡ての物品の價格は皆さう行くものであると云ふことを。

けれども、產業家も商人も矢張り我々と同じ國民であり同胞であり、のみならず、彼等の凡てが不當利得を貪つて居るわけでもなからうから、無暗みに我々主婦達が非買同盟をするならば徒に彼等を苦しめ陷れるようなことがあるかも知れない。そしてそれは決して公平でない。さう云ふ人達にも相當の手數料、又は、儲けと云ふものがなければならない。併し、どの邊迄が正當な手數料であり儲けであり、どの邊からが暴利であるか分らないと云ふのが一般消費者の、少くとも私のいつも疑問とする處で

す。で私は、長い間正當な價格を調査して發表し得る權威ある機關の設置を——我々消費者が安心して買物が出來ると同時に産業者商人達の生活も脅かされない程度の物價の標準公示を——望んでゐました。

『世帶の會』が創立された時に、同會が此の方面に活動されることを密に望んで居ましたが、併し、これは大事業であるからして到底一個の會位ひの力では遂行し得るものでないと思つて私はだまつてゐました。

處が、今回政府は當面の物價低下に關し施設すべき事項十九項目を發表しました。そして、そのうちの第十五項に『日常必需品の價格を調査して之を公示すること』とあるのを見て、少くとも政府が此處に氣の付いたことを私は喜びました。そして氣が付いた以上必ず此れを空文に終らしむることなく、充分に活用し、徹底的に正確に實行して、そして一般國民に有効に利用させる方法を講じられることを私は切に望んでゐます。

今回發表された十九項目をいよいよ實行に移そうとする時には各方面からの苦情、又は、弊害が伴ふと云ふことは、既に新聞紙上でやかましく云はれて居るのを見て居ますが、併し物價を正確に調査して其れを公示するに付ては何處からも苦情が出るわけもなく、弊害が伴ふ理由もありません。

たとへば、私が小豆を一升買はうと思ひます。今日の相場はいくらだらうと、先づ政府の公示板を見ます。其處に『三十錢』と書いてあるならば、乾物屋へ行つて三十錢出して一升與れと云ふのです。もし、乾物屋が三十錢では賣れないと云ふならば、そんなら公設市場へ行かうと云ふのです。乾物屋は商賣を續けて行かうとするならばいやでも應でも三十錢で賣らなければならなくなります。そして、政府の調査が正確なものであるならば三十錢で賣つても必ず儲けがあるに相違ない。無ければそれは問屋の方に無理があるか、無駄な運賃を拂つて居るかして居るのであるから、其の邊は小賣商人が自分で仕末して行くと思ひます。そして、物價は自然に調節されずには居ま

せん。

物價の亂調は國民の低級な虛榮心が大きな原因の一つであることを私は認めます。たとへば、さしみが非常に高くて普通一般の家庭では到底手が出ない時に、其れを喰ふことに誇りを感じたり、又は、お召縮緬が流行すると云へば、四苦八苦の工面をしても其れを着なければ人に見下げられるように考へたりする。そして、こう云ふ愚にも付かぬ氣持ちがいつも商人の付け入る處で、法外な高價が保てる所以であることも承知して居ます。

けれども、一方にはさう云ふ虛榮心が暴威を揮つて居ると同時に、又他の一方には非常に細かいむしろ汚い位の心理が働いて居ます。そして其れは少しでも安いと思ふ店へは買手が殺到することです。殊に、呉服ものなどの割引き値段が誰の目にも明かである場合などには、丁度、砂糖に群がる夏の蠅のやうに女達は其の安い呉服ものに一杯たかつて人を押し除けても早く自分が目を付けたものを買ひ取らうとします。餘

り淺間しいと思ふ位、女達は安いものを買ふことに熱中します。

ですから、もし、政府が女達の此の心理を利用するならば物價の低下は比較的容易に實現されると私は考へるのです。つまり、日常必需品の價格が正確に調査され、權威あるものであり、適當な場所に公示されてあり、そして、相場の變る度毎に書きかへてあるならば、それは必ず有効に利用されると思ふのです。日常必需品輸送上の便宜を圖ることも、購買組合の普及も勿論必要でありますが、正確な物價の公示と各家庭の主婦達の覺醒と云ふことと、そして、其の價格に權威あらしむるように其の價格で賣る公設市場の增設、既設公設市場の改善が、先づ以て物價調節策の鍵であります。此の鍵を造つてから後の凡ての施政は皆有効に活用出來ますが、この鍵なくしては、どんなに他の方面に金と人の精力とを費しても其の割りに効果は上がらないと私は思ふのです。

政府は物價騰貴の一因として小賣業者の不當利得を數へ、其の不當販賣を取締るた

めに此の際彼の寺内内閣時代に設けられた所謂暴利取締令を改正活用するか、又は、全然、新らたに法令を制定するか、いづれにしても相當の取締りが必要であるとして過般來考慮中であつたとか、それに對しては種々反對運動があつたとか云ふことがありましたが、實際さう云ふ風の取締り方では面倒が多くてやりきれないに相違ありません。

けれども、政府で調査し、公示した價格以上では斷然買はないと云ふ決心を各家庭の主婦達が持つならば何處からも文句のありようもなく、無理がないから弊害が伴ふ筈もなく自然に暴利を取締ることが出來ます。

勿論、此仕事を徹底的に有效にするには生産者からも商人からも文句が出ないような公平な値段でなければならず、そして、もし商人が其の値段で賣ることを拒むだ場合には公設市場で一切が間に合ふように公設市場の増設、及び、既設公設市場の完備が必要であることは既に前に云つて置きました。

それから、政府が公示した價格以上の値段で買物してはならぬこと、それは自分の損失であるばかりでなく、物價の調節を不可能ならしめ、全體としての國民の生活が脅かされ、果ては民力減退と云ふ恐ろしい結果を見るようになると云ふことを全國に說明して步く必要があります。そして、其れは、女學校は勿論各小中大學校、あらゆる婦人團體、宗敎團體から、とにかく、あらゆる機關を通じて徹底的に其の意味を國民全體に會得させなければなりません。

さう云ふ仕事は個人の力や、又は一小團體の力などでは到底及ばないのでありますが、政府の力をもつて國家的に斷行しようとするならば、それは容易であります。容易でなくとも少なくとも可能です。

故に、政府は物價調節策に對して費そうとする金と人の精力とを以上私が述べて來た方面に集中して、先づ、物價調節の鍵を造り、其處から徐々と必要に應じて仕事を進めて行かれることを私は切に望みます。



稀薄になりつゝある人格的關係

私共個々の人格的な關係はぜん〳〵と稀薄になつて、益々經濟的に無人格的に其の關係は變化しつゝあります。そして、これは產業革命があつて以來のことです。

私共の手道具は私共の人格、私共の熟練を象徵するものであるに反して、機械は無人格な不熟練な無暗みに大規模な仕事を象徵してゐると云ふことは前にも本誌上で一度云つたことがありますが、こう云ふ大規模な機械產業組織に於ては人格的なよりよき仕事をしようとする本能が益々萎靡してしまふ、つまり、自己表現の衝動が益々微弱になつて行くのです。

そして、此の自己表現の衝動が益々萎靡しつゝあると云ふのは唯に產業界に於ては

かりでなく、政治上にも、社會上にも、宗教上にも、藝術の上にも、又、遊戯のことに至る迄も現れて居ます。つまり、以前には、人は皆個人的に直接に關係して居たのに反して、今日に於ては、一般の人は、唯、一單位に過ぎない、何もかも團體によつて代表され、其の道の專門家によつて取り扱はれて居ると云ふかたちになつてしまつて居ます。

今日の社會的活動の大抵に於ては、人々は自己の意志を働かすのではない。むしろ見物人であります。專門的政治家の意志、其の勢力に盲從して、唯、單に、租税を拂ふ役目を持つて居るに過ぎないと云ふかたちになつてゐます。

都會の生活に於て、殊に其れが著しくなつてゐます。都會に於ける個人は無名になつてしまつてゐます。都會に住む一個人は、其の生活の全部ではなく、唯、一、二の點に於て、つまり、商人とか、市會議員とか云ふ點だけしか表面には現れてゐません。都會生活に於ては、自己を表現しようとする自然の門戶が閉されてしまつて居るので

す。其處で、大部分の人の心は落ち付きを失つて、常に、新奇を求めてゐます。そして、又、其の弱點を新聞や、興業物がつけこむと云ふかたちになつてゐます。

不健全な思想、不安な狀態は現代の特長だと云はれて居りますが、其の原因が人々の内にも外にも、つまり人自身の心のうちにも其の人を取り卷いてゐる社會にもあるのですから其の結果は實に恐しいことにならずにはゐません。

終日の勞働のために、人は皆可なり神經細胞が破壞されるのですから、休息時間には其の破壞された神經細胞の修理をこととしなければならない筈であるのに、大多數の人は、破壞された其の神經細胞を層一層破壞するような行動に出てゐます。

近着のグラスゴー●ヘラルド紙上にアンニー●スワン女史が健全な肉體と健全な精神と云ふことに付て書いてゐます。實際、餘まりに明瞭に分つて居ることが實は分つてゐない、つまり言葉で了解して居ても、自分自身に體得はして居ないと云ふことに

付いて、スワン女史は次のように云つてゐます。

健全な肉體に健全な精神と云ふ言葉は私の幼時、父が毎夜の祈禱に用ゐたので其の言葉は私の頭に確りと刻み付けられてゐて離れない。其の頃、私の了解出來る範圍内に於て、私の周圍の人達は皆健全な肉體と健全な精神の所有者であつた故に、其の言葉が何故に祈禱の言葉となつてゐるかは分らなくとも、とにかく、其れは子供にも了解できる程單純な言葉であつた。

併し、人が、其れを經驗に照して考へるやうになるならば、その祈禱の言葉は、最も高尙な男女のみが希望するものであることが了解出來る。何故なれば、健全な肉體に宿る健全な精神は生存競爭に對する要具として必要なものの全部である。若し人が健全であるならば、その人は物の全體を見る事が出來る。その人の內部には何等のわだかまりもない。その人は明瞭とした眼を以て夜明を迎へる。陽の出現を恐れない、けれども實際には、幾人、さう云ふ人があるだらう。

先づあなた方の知人の上にあなたの心を走せて御覽なさい。そして何物にもこだわつて居ない人が幾人あるか考へて御覽なさい、私共が知人と挨拶を取り交す時に『私共は皆健全で居ります』と云ふ答へを私共はいつも受けるだらうか？　さうは行かない。何處へ行つても人はあまりに健康に就て、話し過ぎる。害されてゐる康健を回復させるに付いて、病氣が治る迄の手當の方法に就て、余り多くを話す。或ひは又その病氣が私共の肉體と云ふ家の永久な住居者でゞもあるかのやうに、その病氣を保持して居る人もある。

斯ふして病氣に就て話し、その治療法に就て話し、食物に就て何が好いとか悪いとか云つて話し過ぎるのは時代の弊の一つであると私は思ふ。

普通に觀察して見て、私共はさうすることに依て何等の改善をも見ない。唯、退歩があるばかりである。凡てのものが云はずとものものが、明るみへ引き出され興味と熱心とをもつて話される。自己の病に就て或ひはその病に對してなした手當の一切を

吹聽する爲に其の傾聽者を見付け得た時程愉快な時はないやうに思ふ人達がある。けれども、其の傾聽者となることは、私共にとつて、最も苦しいことの一つである。

若し私共が禮儀を無視するならば、其の苦しみは餘程輕くなるだらう。であるからもし、人々が自分達の病氣に就て話す事は惡ひ事であり、卑俗であり、無作法であると考へるやうになるならば、私共はより愉快に、より幸福に、より健康になるだらう。多忙な人達は暇な人達よりは苦しまない、分けても、些細の病氣には苦しまされないと云ふ事は誰れでも知る事實である。朝、少しの氣力もなく、私達は仕事に取りかゝることがある。そして人は云ふ。急務と云ふ刺戟がなければ吾々は決して起き上がられるものでないなぞと。朝はものういい氣持ちで始めても時としては非常に有効な日を過すことがある。倦怠と疲勞は外の興味に壓倒されて消へてなくなるか忘れられてしまふのだ。

之れに反して、若し私共が何もせず寢て居つて自分達の疲勞に就て又は僅かの苦痛

に就て考へて居るならば私共は直きに本當の病氣になつてしまふ。勿論無制限ではないが。思ふに私共は安心し、信賴して、それを自然に任せて置けばよい場合ひが往々あるのだ。實際、自然は自分の業務を知つて居る。そして私共からの何等の助力も要求しない。自然は私共に起床時間を告げるための鐘、及び、私共の休息時間、又は祈禱の時間を知らせるための鐘も持つて居る。けれども私共の多くは自然を信じない。そして自然を避けやうとする。其處で自然は復讐をする。

私共の行爲、私共の日常の生活には多くの規則が投げつけられてある。それをうるさく思ふことがある。それで時に依ると、何にか新しい方式を造り、其れを自分にも實驗し、他人にも試みさせやうとするものが出て來る。けれども、私が想像するに、そう云ふ人は世間を泡立たせるだけで、寧ろ厄介な人間である。私は一人の夫人を知つて居るがその夫人の夫は全く食物に氣を取られて居た。彼は決して同じ食物を二週間續ける事ができなかつた。で、その夫人は夫の氣に合ふやうにしやうとして苦しん

で骨身りにやせてしまつた。彼女が今なすべき事は自分が其の仕事をやめて夫に彼の食物を造らしむる事である。然し、勿論人の背にある荷物を外の人の背に移すのは容易だが、若しそれが自分の上にあつたとしたら、恐らく私共はどうすることも出來ないかも知れない。とにかく、其の男は健全な肉體に健全な精神の持主ではない。彼の考へ方は間違つてゐる。其處で、彼を救ふ道は彼をして彼が凡ての人の、殊に彼の不幸な家族のためには怖ろしい厄介者である事を悟らせることである。一朝、彼を悟らせることが出來るならば、彼はいつも同じ食物で滿足してゐるようになるだらう。そんなことに、多くの時間を費すには、この人生は餘りに短かく、又餘りにすることが澤山ある。

そんなら如何にして如何なる規定に從つて私共は生活すべきであらうか。私の父親の新の言葉、健全な肉體と健全な精神はどうして得られるであらうか？　肉體に付ては出來得る丈考へない事に依つて、熱心に仕事に從事する事に依て、他人に就て考へる

事に依て、つまり出來得る限り人に迷惑をかけないやうにする事に依つて、健全な肉體、健全な精神は養はれる。

私共は面倒を造るのではなく、面倒を避けるのが目的である。仕事が治療であり、解毒藥であり、無二の醫者である。胸に手を組んで眠るより外に何んにもできない程疲れる迄働き得る人は幸福である。

と。スワン女史の此の言葉を聞く迄もなく、實際、現代に於ける大多數の人は、ものゝ見方を誤まつてゐて、どうでもよいことに心勞し、神經を疲らせ、そして、神經衰弱に陷つてゐるのです。或る人が、『赤子はものをあるがまゝに見るが、大きくなるに從つて、目も耳も用ひなくなる、又、文明が進めば進む程、手も足も用ひなくなる』と云ひましたがこれは至言です。

現代人の不安、神經衰弱を癒やすのは容易な仕事ではありません。其の原因の一つ

となつて居る機械に對する觀念からして變へて行かなければなりません。が、此の場合は、何よりも大切なことは、殊に、女性の意氣を大いに上げなければならない此の秋に當つて、婦人が必ず忘れてならないことは、ものを正當に見る眼を養つて、どうでもよいことに心を奪はれたり、神經を無駄に疲れさせたりしないことであります。

人格的な關係がだん／＼稀薄になつて、益々經濟的に無人格的に變化しつゝある此の惡傾向を喰ひ留めて、新時代を正道に導き入れるのは、健全な肉體と健全な精神を持つた新婦人の任務でなければなりません。

草間列二

心なき石も動きて思へにけり傑ふあやめのかたへにやれば

泥濘は洗ひさられて土新た霖雨の後の道行けば涼し



英國婦人の特長と英帝國

『××地方の人の思想は過激だ』とか『〇〇地方の婦人は進步して居て、洋服が流行して居る』などと云ふことを聞くことがあります。けれども、實際には、社會主義にかぶれた人が三四人あつたり、又は、女子大學あたりを出た婦人が二三人洋服を着て居るに過ぎないので、一般人は、矢張り、他の地方の人達と思想上にも日常の生活の上にも何等變つた處がないと云ふ場合ひが度々あります。

それと同じわけで、英國婦人と云へば、人は直ぐ猛烈な婦人參政權運動をしたパンクハースト一派の婦人を連想して、英國婦人は皆はねツかへりであるように思ひますけれども實はさうでないのです。世界一周旅行に出て居る山田嘉吉氏の旅行記の中に

も、

「紐育では、懐中鏡を見ながら街路を行く女を幾人も〳〵見た。彼女等は肉慾其のものであるように見ゆる程、肉感的で唯物的である。どうかして異性の注意を引かうとすることが彼女等の考への全部であるように見へる。大部分の女の着物は全然女優の着物だ。彼女等は毎日芝居を踊つて居るのだ。」とあり、それに反して、『英國婦人は眞面目である。服装は端嚴で、態度は親切である。社會事業に關しても、米國婦人のように無暗みに大聲は擧げないが、併し、實際の仕事は着々進めてゐる、米國婦人は、まるで、夢を見てゐるようであるに反して、英國婦人は地にしつかり足を付けて歩いて居る。』とありましたし、又、此の頃、英國婦人を詳細に研究した人の話に、『勿論中世紀の城主の妻が、愛する夫に對して居たような儀式ばつた謙遜な態度は、既でに過去のものになつてゐるが、そして、夫と妻との間はズッと砕けて、心易立てに、一層親密にはなつてゐるが、併し昔の城主の妻が持つて居たような優しい情操、謙遜な態度

が、矢張り、今日の英國の妻達の特色である。』と、云つてゐます。

外國人が英國の家庭を見て、第一に氣付くことは主婦の人格が家庭内の隅々に迄々現れて居ると云ふことだそうです。つまり、一家を支へる生計費は全部夫が負擔して居るとしても、家庭内の空氣は全然主婦によつて造られてあるのです。そして、彼女達の最も特色とする處は、其の全精神を傾けて家族の者全部を抱愛するばかりでなく其の家庭を訪問する知人、友人をも主婦が彼女の廣い溫い胸のうちに抱擁することであつて、これは英國の家庭の特色として廣く知られて居る事實です。ですから、英國人の家庭に客となつて居ても人は自分が其の家庭の客であると云ふことを忘れて自分のうちに居るような心持ちにいつの間にかなつてしまふのだそうです。

故に、英國婦人を本當に知るには、家庭に於ける彼女を見なければならないのです彼女達は英國婦人としての驚くべき本能によつて彼女の家庭を輝し、そして、其の光りによつて、又、自分自身を輝かせて居ます。實に、英國の家庭と英國婦人とは同一

物視されてゐます。家庭は婦人であり婦人が家庭であるのです。ですから、婦人が家庭の主婦としてゼロな人間であるならば、其の婦人は、どの方面でもゼロな人間として目されます。

英國が國家として、健實であり、隆盛である源は此處にあるのです。家庭を重んじ家庭を輝かせることが婦人として人としての誇りであると英國婦人が信じて居る處に英國の未來ある生命が潑溂として居るのです。英國婦人の一人殘らずが家庭を重んじて居ると云ふことは出來ません。英國の家庭が全部輝いて居るのではありません。

家庭の繁雜を厭ふ婦人も勿論あります。眞面目な家庭を持つことが出來ない程墮落して居る婦人もあります、貧乏と無知のために地獄のやうな家庭を持つて居る人々もあります。そして、それ等が、絕へざる社會問題の種となつて居るのでありますが、併し全體としての全英國を支配する精神は毅然として聳へてゐます。そして、それは儀式ばらない歡待、贅澤とならない程度の慰安、虛飾的でない交際等でありますが、

其れには、眞面目で聰明な英國婦人の精神が貫いて居るのです。

智力的に道德的に世界に於て優秀な英國婦人の裝飾（室內、及び、服裝の）に付ての趣味は、勿論、高尙でありますが、併し、彼女等は此の方面に付ての創意を缺いて居るので、絕へず佛蘭西婦人から此の方面の知識を供給されて居ります。帽子から、被服から、靴に至る迄も佛蘭西婦人にならつて、そして、其れに自分等の意匠を加へて自己に適したものを造つて居ます。

夫婦關係に付て、英國の妻達の特長は、其の溫い、優しい手で、良人を保護しようとする態度です。丁度、母が息子に對して持つてゐる態度を、英國の妻は良人に對して持つて居るのです。身體ばかり一人前になつてゐても、まだ、男一疋として世間を通るには少々あぶなツかしいと云ふ息子に對して母が持つてゐる自負、並びに、心遣ひと云ふような氣持ちを一般の英國の妻は其の良人に對して持つてゐると云はれて居ます。

ですから、彼女は家庭内に於てばかりでなく、社會に出ての良人の行爲に對して迄も自分に責任を感じて居ます。そして、良人を成功させるためには、どんなことをも忍ぶ、又、努力を惜しまないと云ふ氣風を持つてゐるのです。

一體、男は、一般には、餘程大きな出來事に遭遇した場合の外は、妻のために自分の全部を投げ出すやうなことをしません。けれども、女は、事柄の大小に拘らず、常に夫のために全心全力を用ひて居るのですが、英國婦人には、殊に、其れが著しいのです。そして、これは、我が國の昔風の婦人が持つて居た美點です。

我が日本の昔風の女は良人のために自分が全然犧牲になることに付ての覺悟を充分持つて居ましたが、併し、良人の愛を全部占有しようと云ふ慾望は持つて居ませんでした。否、持つて居ても、其れは望むべくして實際には持ち得ないものだとして諦めて居たのです。けれども、今日の英國婦人は其れを要求してゐます。ですから、男子は結婚に際しては、自分は妻の良人であり、同時に戀人であることを覺悟して居なけ

ればならないと云はれてゐます。

理想は、さうであつても、一體、理想を實現することは、どの方面の、どんな事業に關してでも難しいことです。そして、さう云ふ點に付ても、理解のある聰明な英國婦人は、細心の注意と、絶へざる努力によつて、逸し去らうとする男の心を繋ぎ止めることに苦心して居ると云ふことです。

英國人にしても、他の國の人間と同じように、血氣にはやつて誤まりをすることがあるには相違ないですが、併し、彼等の發達した常識と、家庭尊重の本能は彼の反省を速かにするので、一時の出來心のために、神聖視されてゐる堅固な夫婦關係、及び家庭を破壞するようなことは少ないのです。

エッチ●ジー●ウエルス氏が、『戀愛の三角關係を取扱つた劇は他國に於てと同じように英國に於ても普通のことになつて居るが、これは矢張り英國民の日常の生活とピッタリ合つてゐる。』と云つたのに對して、倫敦の貧民窟が英國の風景を代表するもので

ないと同じ意味で、偶々起る戀愛の三角關係が決して英國民の特性を代表するものでないと云はれて居ます。

一國民としては、英國民は、性的の空想を持たない國民であつて、むしろ、潔癖であると云はれてゐます。又、英國青年婦人の盛んな運動競技は彼女等の空想を抑制し彼女等の思想を堅實にして居るとも云はれて居ます。ですから、佛蘭西婦人が話題に上る時は其の婦人の貞操がいつも問題になるに反して、英國婦人が話題に上る時には其處に反證が擧げられない限りは、純潔なものと斷定されて居ります。此の二國の婦人の信用には、それ程、大きな差があるのです。良人の品行に關しても、英國婦人は自分自身を信じて居ると同じ程度の確信をもつて、其の潔白を斷言し得るに反して、佛蘭西婦人には、さう云ふ斷言が出來ないと云ふことです。

ですから、未來の婦人運動に於ては、ふらふらしてゐる佛蘭西婦人よりも、又、見せびらかしの多い亞米利加婦人よりも、英國婦人がより堅實により有効に人類の幸福

に貢献し得るであらうと云はれてゐます。

結婚に關しては、まだ英國婦人の理想に合はない處が澤山あるのですが、併し、婦人の力と婦人の知識が益々勢力を得つゝあります。もし、まだ、經濟的に無駄をするとしても、或ひは又、實利よりも感情が先きになると云ふ傾きがあつても、其等の弊は追々取り除かれつゝあるから、彼女の實行的の本能は經驗によつて、より堅實になり、より有力になる可能性を持つてゐる。今日迄の經驗によつて、彼女等は今後も、世界の最高文明國の國民として學ばねばならぬ凡てを學び得る可能性を具備してゐる。英國婦人は、其の活動力に於て、才能に於て、美徳に於て、世界の何處の國の婦人よりも一段優れてゐると云はれて居ります。

煤煙に爛れし炎天の街は聲なし

長島長吉

消費組合の歴史

一、英國

消費組合と云ふものが始めて生れた處はマンチエスターの近くなるロッチデールであつて、それは一八四四年十二月二十一日でありました。そして、會の名は"The Equitable Pioneers of Rochdale"と云ふのですが、其の後、あちこちに無數に生れた消費組合は、皆、此の會と同じ精神に於て生れ、此の會の型に從つて設立されたものです。ですから、今日に於ても猶ロッチデールの此の消費組合は各國の消費組合の親と云はれて居ります。

此の會の創立者は織物工でありましたが、其のうちの何人かはオーエンの門弟則ち、社會主義者であり、其の他の者はチヤーテイスト（一八四〇年頃全國民に投票權を與ふべきこと、國會議員たるに財産の制限を用ゆることを廢すべしと云ふ說を唱へた人）でありました。が、とにかく、彼等は皆英國人の特長なる自治の精神、或ひは、寧ろ、相互補助の精神を强く持つて居りました。

彼等が先づ第一に絕對に必要のものとして居つた僅かの資金を造るために、彼

等は滿一ヶ年間非常な努力を續けました。そして多數の脫會者があつた後に、殘る二十八人が二十八封度の資金を持つて會のために忠實に踏みとゞまつて居りました。これが消費組合運動の出發點でありまして、僅か七十六年後の今日此の運動は何れの國に於ても行はれ、そして、二千萬以上の家族の結合となつて居ります。

消費組合の父と云ふ尊稱が、ロバートオーエンに屢々與へられます。(オーエンはロッチデールに最初の此の組合が出來た頃尙生存して居りました。)この組合の創立者の數名が彼の門弟であつたことは前に申しました。一度び大雇主であつた社會主義者オーエンが、『汝は汝自身の商人となり、製造人となり、最上なる質の物品を最低の價にて、供給せねばならぬ』と云ふ法式を以て立派に協同の定義を下したのは事實であります。尙又、同氏が協同と云ふ言葉を一般に普及させたのも事實です。

併し乍ら、オーエンは共產主義の、殊に土地共有の形式の下に彼の理想とする『調和の都市』に於て完全なる協同組合を實現しようとする事が先入して居たゝめに、彼は常にこの消費組合の賣店を輕んずる風がありました。如何なる努力に對しても若しそれが賣店のかたちに於ける消費組合の部分的實現に對する努力であるならば、オーエンはそれが彼の理想とする組織を宣傳すると云ふよりは、寧ろ

彼の組織に不名譽を與へるものと見てゐました。それは、とにかく、一體消費組合と云ふものは、ロッチデールの其れ以前にもいくつか存在してゐたものです。十八世紀の終り頃から五六の組合があつた事は説明できます。一八二〇年に組合の普及の爲に一つの同盟が組織されました。そして、一八四〇年に至る間オーエンと彼の弟子の勢力の下に組合に對する宣傳運動は非常に盛んでありました。其處には同盟があり、新聞雜誌があり、集合があり、無數の小册子は散布され、ありとあらゆる運動の方法が行はれたのでありました。そして、數百の組合はこの運動の結果として設立されました。一八三二年には三百の組合が出來、その頃リバプールに於ては卸賣組合すらも出來たのであります。今存在して居る組合のうちで著名なるシーアネスのそれなどは一八一六年に始まつたのであつてロッチデールのそれよりは古いものであります。

併し乍ら、凡て之等の消費組合を、英國では分配組合と稱んで居りますが、皆その發達を防げる一つの缺陷を有つてゐました。つまりそれは保護をしようとする博愛的運動であつて、殆ど、慈善に近いものであつたのです。云ひかへれば、之れ等は憐憫の感情から出來たものであります。丁度、十九世紀の始め頃機械が手の勞働に代らうとした時、又、地主の利益を計る爲の穀物保護税の增加が續いてパンの價が暴騰し勞働賃銀は恐ろしく

低下された時に博愛家が勞働階級の困窮を救はふと云ふ希望で始めたものであります。（その關税は、ロッチデールを出生地とする、コブデン及び、ジョン●ブライトの貴い運動の結果、直きに廢止されました。）

博愛家の資本を以て設立し、其の博愛家は組合に於ける名譽委員として働き、彼等自身のために組合を利用しようとはせず、そして、唯、廉價と云ふことのみを目的とし、其處から利益を求むるのでもないので、――若し利益があつたとするとそれは株主の間に分配されて、消費者の間に分配されるのではなく、或ひは時としてはその純益は次代の利益の爲とか云ふ夢想的計畫に基いて動し得ない準備金の形となつて埋もれされた――そう云ふ組合でありますから、新しい會員を得ることが出來ません。それ故發展する事はなく、只缺點の多い圓線を永久的に回轉して居るばかりでありました。

稍、後に到つて純益使用法が行はれたのでありますが、それは全會員の間に均等分配をすると云ふのでした。併し之れもその結果に於て決してより好しきものではなかつたのであります。實際、この組織は組合の賣店にて忠實に物を買はふとする熱心なる會員も、其處へ來ることのない組合とは無關係な人達も同じ立場に置かれると云ふことになつたのであります。

これに反して、ロッチデールの開拓者

及びチアレース・ハワースの實際に効果ある理想は、組合の利益を純收入や又は株の數によつて組合員に分配するのでなく、各會員の取引の比例に從つて分配する事でありました。それは會計係りが受取る金高と同じ價値が記された傳票式の方法を用ゆる事に依て最も、簡單にできる事でありました。この組織は、以前、外の組合に於ても行はれた形跡が見へます。又一八二七年或る慈善組合に於てもこの方法が行はれましたが、その時の結果は不明であります。併しそれはそれ迄至つて不活氣であつた此の運動に大なる動力を與へた刺戟となつて居ります。

　此の新しい分配組織を應用した結果、組合運動は以前よりは個人的性質を帶びて來たと云ふことは明らかであります。それは最早オーエンが希望したやうに共産主義でもなく、又平等主義でもありません。何故なれば各人が自己の爲した仕事に對して報酬を受けるのでありますから、けれども共産主義的のたつた一つのものが殘されて居りました、それは會員達に其の配當金を共通資金として預金することを依賴するのでありました。そして、その資金は利殖され團體の爲に使用されるのであつて先づ第一に組合の發達、その宣傳及び社會敎育事業に用られるのでありました。

　之等の二つの傾向は兩者とも組合運動には稍相容れないものであるように思へますが、其のうちの一つなる個人主義的

傾向は現在迄に最も發達して居る事を認めなければなりません。併しながら努力は以前の傾向を復活させる爲に盡されて居りました。

其處で、とにかく、歷史が、公平實現の卒先者なるロッチデールの組合の組織者二十八人の織物工に『組合の父』と云ふ稱號を與へたのは正當なことであります。實に、彼等は二重の功績をあげて居ります。

第一に、彼等は廣い豫言的な態度をもつて彼等自身の時代に對し並びに未來に對して組合の綱領を書き上て居ります。左に揭げて見ます。

一、この組合の目的と計畫は會員の金錢上の利益を計り、社會上と家庭上の狀態を改良するのであつて、その方法は次の計畫と設備とに對し、一株一封度の株を募りその資金に充てる。

一、家庭及び社會狀態の改良を期し相互扶助を旨とする會員が住居する爲に一定の數の家屋を建築し、又は買入れる。

一、組合の決定せる品物の製造を開始する爲に會員中の失業者或ひは度重さなる賃銀低下に苦しみ居る者を雇ふこと

一、會員の利益と安全の爲に組合は土地を買入れ、或ひは賃借なし失業者或ひは不當に低廉なる賃銀を取つて居る會員に耕作せしむること。

一、實行期に達するや否や組合は、製產、分配、敎育及び政治に關する協定に着

手する。換言すれば協同利益の獨立團體を設立なし、或ひは斯かる團體を設定せんとする他の組合に助力すること。

一、禁酒奬勵の爲組合の家屋の一つを禁酒館となすこと。

と云ふのでして、彼等は第一に此の宣言書を作製し、組合の理想を造り、そして徐々と近づきつゝある目的を論證する事を以て滿足せず、第二にそれを實現すべく實行の方法を發見しました。そして、私共がこの法則が最初から全く明確に極く少數のフランネル職工に依て設定された事に心を留め、以來七十有餘年間の經驗がその原則に何等の附加へるものを見出さなかつたのに心を留めた時、そして以來組織された數千の組合が皆殆ど文字通りにこの原則に基づいて居るのに心付いた時、私共はどうしてもこれを經濟的歴史に於ける最も著しい現象の一つとして認めないでは居られません。けれども、これはその頃の經濟學者の注目を惹かずに經過してしまいました。ミルにさへも注目されなかつたのです。實にこの組合運動は賢人の腦から發出したのでもなく改革者の腦から發出したのでもなく、普通人の生活それ自身から生まれたのであります。

ロッチデールの組合が出來る以前にも多くの組合があつたにも拘らず、矢張り其れが今日の各國に於ける無數の消費組合の父であると云ふことを説明して來ましたが、こゝで私共はロッチデールの

先鋒者時代の後の英國に於ける組合の歴史に於て、最も著しい出來事を紹介いたします。一八五二年及び一八六二年にIndustrial and Provident Societies Actと稱する法律ができました。この法律を詳細に言へば、それは、組合の大憲章であつて組合に今迄與へられてなかつた保證と法人組織の成立に法律上の權利を與へたのであります。それ迄は、組合の財産は、組合の最初の會員が、もし、望むならば自分の所有にして居ることが出來たのです。

この法律は基督教社會主義者として知られて居る宗教家の小團體の努力に大部分は歸して居るものです。その中でも最も稱讃すべき人は牧師であり著述家であつたチャーレス・キングスレーであります。キングスレーは大經濟學者ジョン・スチユワート・ミルに助力されたのでした。けれども、實はこの人達は分配組合よりも寧ろ産業組合のうちに、ロッチデールのうちよりは、佛蘭西の社會主義者のうちに、自分達の理想の實現を求めて居つたのであります。

英國の基督教社會主義者にとつて、戰はねばならぬ禍は佛國の社會主義者のそれの如く賃銀制度でありましたが、オーエンと彼の學派にとつては、利益の組織でありました。併しそれにも拘らず、彼等に感謝すべき理由は、凡ての形式に於ける組合が法律上の批准を受けたのみならず、輿論と云ふ後援を得た事でありま

した。

一八六四年にはマンチエスターに於てコオペレテブ●ホールセール●ソサイエテーと稱する、或ひはもつと一般に知られてゐる言葉で言へばC、W、Sと稱する、協同卸賣組合が設立されました。そして、この組合は英國の組合運動に非常なる勢力を與へたのでありますが、尙、今日に於て、日々其の勢力は增大されつゝあります。そして、其の第一步は主にロッチデールの先鋒者の一人である、アブラハム●グリンウードの著手に歸して居ります。このC、W、Sは組合の經濟的と實際的の方面を代表して居ります。

又、一八六九年には組合の同盟協會が構成されました。この團體の事務はユナイテド●ボードとして知られて居る中央行政部に依て管理されて居りまして、それは全英國の組合の爲めに働くのでありました。そして、その當局者は純粹に德義を守るものでありました。この協會は年々の會議を開きますが、それは組合議會の開會のやうなものであります。そして、C、W、Sにとつて組合同盟は丁度人體にとつての魂のやうなものであります。

この時から、英國の組合は最早歷史を有ちません。幸福なる國には、歷史がないと云はれてゐる意味で。何故なれば、英國の組合は、それ自身の力に依つて、順境に進んで來ましたから。そして、今日に於ては組合は國家の生きた力の一つと

なつて居ります。組合はルーズベッリー卿が、一八九〇年グラスゴーに於て開催されし組合會議に於て述べられし如く國家の中の國家であります。後の章に於て知る事ができますが組合は大英國の人口の殆んど、三分の一を抱擁して居ります。其處で、多數の人々は、『組合はその生長と延長との比例に於て退化しはせぬか』と氣遣ふて居ます。

彼等は言ひます、新しい狀態の理想社會を實現すると云ふ企ては先鋒者の心を得意ならしめたものであるが、併し、今ではより多くの配當金と慰安をのみ求めて居ると、一言で言へば、組合は一つの宗教である代りに、單なる營業となつて居ると云ふのであります。事實に於てこ

の運動が、擴張すればするだけ、その根本の德行と云ふものは、人々の群の中に消失してしまふと云ふことは、避け難い事であります。併し乍ら敎育に對して英國の組合員は非常なる犧牲を拂つて居ります故に、これが組合の熱心さを次の時代に傳へて有力なるものとなるであらうと云ふ希望があります。

此處では英國に於ける消費組合の根源に關する詳細を說きました、稍粗略ではありましたが。併し、これ等の制度が英國にのみ、特に存在すると云ふのではありません。これ等の制度は各國に於て、その國に於ける組合運動の行はれる比例に從つて設立されて居ります。（ジート）

（次號には白耳義、佛蘭西、獨逸に於ける消費組合の歷史を掲載します。）

歐州諸國巡察

山田嘉吉

七月十一日。巴里着。コンチネンタル・ホテル投宿。

昨日倫敦から出した手紙にも云つて置いた通り、今朝十時五十分發の汽車で倫敦を立つて、午後八時頃巴里に着いた。巴里は私が以前に居た時程今は美しくない。

七月十五日。コンチネンタル・ホテルにて。昨日は佛蘭西國民のための最大祭日、佛國獨立祭であつた。あちこち見物した處に付て、及びいろ／＼なことに付て話したいことは澤山あるが、其のうちでも特に話したいのはあの大戰爭の戰跡である。昨日の朝八時に巴里を立つて午前十時半にランスへ着いたが、此處はフランスのうちの最も古い都市であり、又、彼の獨軍に三方から包圍され、十四、十六吋の巨砲でドン／＼砲擊され、しかもツイに降伏しなかつた勇敢な都市である。けれども、獨軍の巨砲の跡は慘、又、慘を極めて居る。都市の大部分と云ひたいが、實は、殆んど全部破壞し盡されてゐる。獨軍の方では此のランスさへ陷せば直ぐに巴里を突擊し得るのであるから如何に猛烈に攻擊したか、又ランス市民は婦人も子供も老人も如何に死力を竭して其れを防いだかが想像出來る。であるから『もし、佛蘭西が戰事中國家のために功勞あつたものに勳章を與へるとするならば全國民につまり戰事にたづさばつた小兒にも少女にも其れを與へなければならない』とフォ

シユ元帥をして云はしめたのだ。今日正午十二時三十分の汽車でベルジアムに行く。

七月十五日夜。ベルジアム・ブラッセル市着。パレス・ホテル投宿。午後五時ブラッセル市へ着いて、直ぐ此のホテルへ入つた。第一等のホテルであるから立派には相違ないが、二人前の夕食だけに百フラン（約十六圓）取られた。

七月十六日。パレス・ホテルにて。ベルジアムの首都ブラッセルは大きくはないが小巴里の稱ある、氣持ちのいゝ都だ。今日はウエリングトンがナポレオンを再び立つ能はざるようにした處、ナポレオンをしてセント・ヘレナの一孤島に於て悶死せしむべく彼の運命を決定した處、ウオターールーを見物した。婦人の手によつて建設されたと云ふ三角塔があつた。其處はブラッセルの南方汽車で四時間ばかり走る處だ

七月十七日。アムステルダム着。アムステルホテル投宿。今朝八時四十三分ブラッセルを立つてアントワープに行き、其處で二三時間を費してから、汽車でオランダに入りオランダの首府ヘーグへ行つて、自動車を雇ひ、萬國仲裁々判所平和殿を始め、あらゆる有名な場所を見て歩いた。それから、直ぐに、又ヘーグを立つて此のアムステルダムに着いたのは午後十時半であつた。十時半でも、まだ／＼日は暮れてゐない。

七月十八日。アムステル・ホテルにて。今日は當市で用事を足したり、見物したりして明朝獨逸に向ふつもりである。アムステルダムはまるで繪のような美しい處だ。大きな造船所がある。

七月十九日。ベルリン着。カイゼルホツフ・ホテル投宿。今朝午前八時四十七分アムステルダムを立つて今夜九時ベルリンに着いた。

七月二十日。カイゼルホツフ・ホテルにて。歐洲の電車は何處へ行つてもキレイで乘り心地がよいが、併し、獨逸の電車ばかりは非常にキタナイ。恐らくこう云ふものに金をかける餘裕は獨逸にはないのであらう。一夜の部屋代が四千五百マルクと聞くと驚くが、併し、これを日本の金にすると二十六圓だ。三マルクの葉卷は可なり上等だが併し日本の金では

たつた一錢五厘だ。

七月二十一日。カイゼルホッフホテルにて。獨逸の物價は非常に安いが其のかはり何にもかも粗末なものだ。

七月二十四日。カイゼルホッフ・ホテルにて。昨日はマグデブルグへ行つて來た。マグデブルグは九世紀に建設された古い都で人口は三十萬位。クルップ工場を始めいろ／＼の工場を觀察して歩いた。此の手紙の紙(半紙二つ折りより少し大きい)が六枚で十マルクだ。

七月二十七日。今日ハンブルグへ來た。此處もなか／＼立派な都だ。そして、活氣が漲つてゐる。と云ふのは、これは貿易港であるからだ。いくつも／＼の水の景色が非常に美しい。獨逸に於ける此のハンブルグは英國に於けるリバプールだ。家屋や道路はベルリンよりも餘程清潔で整頓してゐる。尤も、ベルリンは今修復中だからでもあらうが。獨逸人は米國人などよりも餘程勤勉であるが、殊に、このハンブルグの人達は盛んに活動してゐる。中でも、婦人達の活動振りが目に付く。政府の政策に反對して居る者が一方にあるが、併し、政府はとにかく國民のために最上を盡して居るのであるから、國民も直きに其れを了解して政府の事業を助けるようになるだらうと思ふ。それが正しい行き方であると私は信じる。そうしなければ、國家を安全なる基礎の上に置くことが出來なからう。明朝デンマークへ向つて出發する。

七月二十八日。コペンハーゲン着。パレスホテル投宿朝八時四十一分ハンブルグを立つて午後十一時十五分此處へ來た。ハンブルグから獨逸の國境フルエースブルグ迄獨逸の汽車で來て、其處からデンマークの汽車に乘り替へた。勿論、兩國の税關を通らなければならないから二度調べられた。

其の汽車を乘り捨てゝから暫くの間渡船へ乘つて、再び汽車へ乘つて、又、渡船へ乘つて、それから、又三度目の汽車へ乘つて、やうやく、デンマークの首都コペンハーゲンに來た。そして、此のホテルはPaladshotellet と云ふのだが、英語で云へばパレス

ホテルなのだ。相變らず立派なホテルで私の部屋は一三一番、浴室が付いてゐる。

七月二十九日。パレスホテルにて。物價は隨分高い。朝食に卵とパンにバタをつけて其れにコーフイーが付いて日本金四圓だつた。今日は早くから活動しなければならない。なぜなら土曜日だから何處でも事務は十二時迄しかとらない。此處には三日滯在する豫定である。

七月三十日。パレスホテルにて。今朝七時起床。入浴。八時朝食。暫時休息の後自動車を呼んで市中の內外を見物に出かけた。家屋のカタチは英國の家とも佛蘭西の家とも獨逸の家とも亦合衆國の家とも違つてゐる。此の國獨特の特色をもつてゐて堂々としてゐる。デンマーク國王の住む宮殿はむしろ質素過ぎる位ひ質素であるが、これに反して國會議事堂は非常に大きくて立派だ。何處へ行つても、道路は平らでなめらかで歩いてゐても非常に氣持ちがいゝ。そして、東京、其の外我が國の惡道路は思ひ出しても恥しくなる。

又、汽車に乘つても、船に乘つても、ホテル其の他の食堂へ行つても、客の行儀がよいので本當に居心地がいゝ。日本人はまだ人中へ出た時の作法を知つてゐない。日本人は人中へ出た時の作法を學ぶのが今の處最大急務だ。此の作法を學ぶのが有力な國民生活の基礎だ。此の作法を知らないうちは文明人とは云はれない。野蠻人だ。

八月一日。再びベルリン着。今夜十時にデンマークから行きとは別な線路を通つて獨逸へ歸つて來た。そして、自分の部屋へ夕食を運ばせて食べた。二三種の野菜を添へたうまいビーフステーキにコーフイー。ビールも少し呑んだ。

八月二日。カイゼルホツフ・ホテルにて。さて、これから歐洲に於ける最後の旅仕度をする。今朝は先づ切符を買はなければならない。スイツツル、イタリーを通つて巴里に行く通し切符を。それから巴里からまつすぐにマルセーユへ行き郵船會社の諏訪丸に乘つてシンガポールに行く。

獨逸へ外國人が出たり入つたりする時には規則が非

常に面倒だ。殊にものを買つて持ち出そうとする時には其の調べのきびしさは甚しい。であるから、ベルリンで少しばかり買物をしたが、其の面倒を避けるために小包みにして送つた。

八月四日。スイッツル・ジェネバ市着。グランド・ホテル投宿。ベルリンから二十四時間汽車で走つた後午後十時過ぎ當市へ着いた。直ぐ食事をして、非常にくたびれて床についた。

八月五日。グランドホテルにて。ジェネバは實にいゝ處だ。殊に、私の部屋はジェネバ湖に面して居て、其の上に此のホテルと湖水の間は公園なのだ。水がスッカリ澄んでゐるから、游いで居る魚を數へることが出來る。アルプス山を向ふに控へて湖水の全面に日光が輝く時、實に、それは莊嚴な眺めだ。日本を立つて以來見たもののうちで、これが最も莊嚴であらうと思ふ。子供等の土産に少しばかり買物をしてから國際聯盟本部へ行つて新戸部さんに逢つた。佛蘭西の哲學者アンリー・ベルグソンやラヂユームの發見者キユリー夫人、其の他世界的の男女の學者達の風貌に接した。と云ふのは此の學者達は世界の知力の融合を計るために會議を開いてゐる。皆で六人居る。獨逸の大數學者アインスタインは來る筈であつたが來なかつた。猶又植民政策に關する會議が開かれてゐる。けれども、實際に有効な仕事が出來るかどうか考へものだ。もし彼等が新聞記者達に煽動的な記事を書かせる種を蒔かなければ幸ひである。各國政府の施設に付て多くの調査や質問がある。そして、日本代表者は他の國の代表者から隨分苛刻な質問を受ける。これは決して日本のために有利でない。なぜなら他國の政府でも日本政府と同じようなことをして居るのだ。けれども我が代表は他の代表と同じように強く苛刻に質問する力がない。其のために他の代表は彼等の弱點を暴露させられることを容易に逃れる。とにかく、日本から送られてゐる我が外交官のすることの殆んど凡ては我々日本人を失望させる。彼等の妻達の態度も亦お話にならない。徒らに白人外交官の妻達と衣裳の競爭に腐心してゐると云ふ有様である。馬鹿なことだ。どんなに苦心し

たつて子供の時から異つた生活、異つた訓練を經て來てゐる彼女等は外國婦人のような恰好になりはしない。日本婦人は實に貧弱に見ゆる。殊に街路を歩いて居る彼女達の樣子は實際見て居られない。彼女等には相當な日本服を着て居て貰いたいと思ふ。其の方が餘程立派だ。

八月六日。グランドホテルにて。アルプス山上に咲き匂ふ花の繪を送る。世界に名高いアルプス山上に咲く花と云つても見た處では平地に咲く花と格別異つた處はないように思へる。けれども、異る處は非常に强い高いかほりを持つて居ることである。丁度威嚴ある高尙な人も、普通の人間もカタチに於て、見かけに於て何等異る處はなくとも、人格の光りと云ふものがあるように、空氣の稀薄な寒い、時によると雪に苦しめられながら咲いた高山の此の花は香しいかほりを發散して近かよる人々の凡てを喜ばせる稀薄な空氣、寒い氣候に耐へて發達した人格のかほりは丁度此の花と同じように萬人を喜ばせる。そして、萬人の救ひとならずにはゐない。特に偏見に囚はれて居る者こそどうすることも出來ないが、其の意味で此の花の繪を送る。

イタリーに行くことは最初からの計畫でもあつたし今迄も行くつもりで居つたのだがもう其の時日が無くなつたので、イタリー行きはあきらめることにした。もう直ぐ、巴里に歸つてマルセーユへ向はなければならない。

八月八日朝。グランドホテルにて。ジエネバからの最後の手紙を書く。今日は午前十時五十分の汽車で巴里へ歸へる。昨日新渡部博士と共に此のホテルで食事をした。博士と博士の友人ジエネバの銀行家とが或るミルクフアクトリーを視察するように勸められ紹介狀を下さつた。けれども、其の工場は七十哩も離れて居るし、時間に限りがあるから汽車では到底行つて來られない。それで自動車を雇つて走らせた。處が、やうやく其の工場に行き着いて案内を乞ふとピタリ拒絶された。莫大な金と時間を無駄にして結局くたびれ儲けであつた。朝食にこれから食堂へ行く。（五十八頁へつづく）



歸省（前號の續き）

原田琴子

翌日は珍らしい冬晴の日であつた。朝飯後、ゆみ子は緣の硝子戸に凭れて、庭一面からぽか／＼とあがる水蒸汽を眺めてゐた。

ゆうべおそくまで眠れなかつたせゐか、頭はあまりはつきりしなかつた。うしろの方がしびれるやうな感じがした、けれど心持は割合に落ついてゐた。生れた家へ歸つたのびやかな感じがあつた閑寂な庭の冬景色を眺めてゐると自然に心がなごむのであつた、

疎らに枯れた樹の枝にも、赤い南天の實にも、鉢植のほのかな山茶花にも、靜かな朝の光線が流れて、そこに小やみない生命の活らきが動いて居た、萬物は靜かに眠つて居る――けれど眠りつゝもなほゆるやかに呼吸することをやめなかつた。あらゆる生命の靜かないぶきがそこゝに感じられた。

ゆみ子は暫らくの間、たゞぼんやりと我を忘れて居た。新鮮な日光は硝子戸を透して、ゆみ子の



肩から胸のあたりまでを明るく染めてゐた。足下にもあたゝかさが感じられた。一瞬間ゆみ子はしみぐ〳〵健康のありがたさに打たれた。幸福に近い思いがした、然しふと眸をあげて、芝生を越え、池を越え、小高い築山を越えた向ふの木立の上の蒼い空、その空に浮んだ一抹の白い雲を眺めると共に、一條の寂しい風の流が胸に、浸み入るやうに覺えた。それは最初は淡い哀愁であつた、人生の儚なさ、いはゞそんな漠とした感じであつた。然しやがて、ゆみ子はその淡い哀愁が團書に、苦惱に、移り、そして恐ろしい混亂の中に、心が卷き込まれるのを覺えた。

『もうきまつてしまつた事だから何とも云はない方がいゝよ――』

今朝朝飯前のお茶の時に母のかう云つた言葉が思ひ出せた。母は、默つてゐるゆみ子の心持を、すつかり知つてゐるらしかつた。そして激しい言葉でも洩されればよいがと案じるらしかつた。

『私が、私が何と云はう――』

とゆみ子は心の中でくり返した。

云つて云ひ甲斐のある事ならばいゝ、けれどもゆみ子の心は、云ふべきことゝ、云つてならぬことゝの區別を、ちやんと辨へてゐた。叔父が後妻を貰ふ、それに對してなんと自分に故障が云へるだらう、自分はまだ子供だ、たとひ子供でないにしても、相談を受けたにしても、それは最後には



叔父一人の意志にあることで、はたからなんと助言すべき事でもない。どんなに不賛成にしろ、不快にしろ、默つて口を噤んでゐる外はない

ゆみ子はかう考へて居た、そして母にはただうなづいて答へたのであつた。

けれどもゆみ子はそれで、平氣では居られなかつた。

ゆみ子は叔父に對する激しい反感を、胸へきれなかつた、憎惡に近い反感、それはまだ異性を知らない若いゆみ子が、叔父一人に對してのみならず、あらゆる男性に向つて懷くものであつた。

「叔父さんだつてあゝいふ人だから獨りで居るのはむづかしいよ。ちやんと正妻を貰つた方が、子供達のしつけの上にもいゝし、世間へ對してもいゝかられ」

とも母は云つた。

「そしてもうすつかりきまつたのですか、日も？」

とゆみ子は顏色も動かさずに、きいてみた。

「話はきまつたのだけれど日はまだなの、此方は早いほどいゝのだけれど。向ふは支度もあるだらうかられ、來春早々位になるだらうかれ。おとなしい女ださうだから、子供達のためにも仕合せかもしれないよ」



かう云つてそれから母は、その女の素性をぽつ〳〵と話し出したのであつた。ゆみ子はぬるくなつた飲みかけのお茶を眺めながら、聞くともなく聞いてゐた。その女はこの近在の相當の農家に生れた次女で、一度嫁に行つたのだが、良人の放蕩を見限つて離縁をとり、今は東京にお屋敷奉公をしてゐるといふのであつた。氣立てもよく、容色もわるくないといふのであつた。そして一生兒の厄介者で暮すよりは、たとひ他人の子供でも育てゝ自分の家を持ちたいと云つて居るとの事であつた。

『まへに三年も一緒にゐて子供が無かつたといふのだから、多分出來やしないだらうとお祖母さんは云ふの、これで子供が生れると一すれ、面倒になるけれど』

母はこんな事までも云ひ添へた。ゆみ子はなんと答へようもなく默つてゐたのだつた。

そんな母の云つた言葉がちぎれ〳〵に思ひ浮ぶと共に、ゆみ子は心の暗雲が、夏の夕立雲のやうにも、むく〳〵とはてしなく擴がるのを覺えた。

荒涼として黄にうら枯れた野原の片隅の、丘の上にある小さな墓、枯草と落葉に埋もれ、雨に汚れた一基の墓標――ふとゆみ子はその叔母の墓を思ひ出した

『さうだ、お墓詣りに行かう、初子を誘つて！』

ぱつと光にでも打たれたやうに、ゆみ子はかう考へついた。と同時に俄かに、廣い、自由な野原



がこひしくなるのだつた。ゆみ子はこの田舎の形式的な墓詣や佛事なぞを重大視しては居なかつた。佛壇に向つて禮拜することさへ、ゆみ子にとつては、無意義であつた。然し墓詣り——墓地に行くことがゆみ子は好きだつた。墓地の靜けさ、寂しさ、安らかさ、今朝はことにそれが懐かしく思はれた。

數十分後にゆみ子は、從妹の初子と一緒に野を歩いて居た。見渡す限り刈盡された淋しい田圃の處々に、青い大根畑が點綴され、限りなく澄んだ大空をうね〳〵とくぎる連山は、まどろむやうに、薄い日に霞んで居る。葉の落ち盡した森か木には何やら小鳥が唄をうたひ。遠くの村からは時折單調な鷄の啼き聲が響いてくる。

「姉さんいつまで泊つてゐるの？」

初子は仇氣なくゆみ子の肩につかまつて云つた。

「いつつて明日の夕方は歸らなければ、お正月にはまた來るわ」

「いつでも姉さんは一晩か二晩なのね、もつと泊つて行けば——もう東京へなぞ行かなければい、



のに、姉さんどうしてそんなに東京が好き？　賑やかだからなの」

「さうね、それより初ちやんは——また東京へゐらつしやいよ、あれはいつだつたでせうね、有楽座の子供日へ一緒に行つたのは」

「お母さんがまだ悪くならない時、學校の試験休みの時よ——でもね姉さん、もうこれからは東京へなぞ行けないわ」

寂しげに眼を輝やかして、初子はかう云つた。

「なぜ、どうして？」とゆみ子は何かをあやぶむやうな氣持で、ふさ〳〵とおさげにした初子の髪を眺めながら云つた。

「だつてね新らしいお母さんが來ると——」

云ひさして初子は、何か云つてはならないことを不圖口走つた時のやうな、極まり悪げな表情をして、眼を外した。

「この子は最早こんな考へ様なする——」

と思ひながらゆみ子は、上の四人の子供等には新らしい母の來るといふことを祖母から云つてきかせたと聞いたのを思ひ出した。



「こんだ来るお母さんにはあんでもおとなしくするだ。先のお母さんの事なぞ口へ出すで無え」

恐らく祖母がこんな風に子供達に云ひきかせたであらうことが、ゆみ子には想像された。そんな様な祖母の言葉を訂正する何とかいゝ言葉が、ゆみ子は今欲しかつた。然し妙に心がこはばつてナチユラルに口が開けなかつた。このいたいけな従妹に向つてそんな問題を語るのは、ゆみ子には堪へられなかつた。

二人は黙つて、乾いた路をカラコロと歩いて行つた。こんもりとした松林の彼方に、平野を横ぎる一すぢの川が、白く日に輝いて見えた。その松林の奥――川邊の砂丘に村の共同墓地があつて、そこに初子の母は永へに眠つてゐるのであつた。

カサコソと落葉を踏んで、ゆみ子等は墓地内の小路へ歩き入つた。数へつくせぬほどの石碑と墓標――中にはまだ生ま〱とした、黒色の鮮かな墓標も見えた。剥んだ文字も消え、青白く苔のむした石碑もあつた。茫々と黄に立ち枯れた雑草がそれらを半ば埋めて居た。

初子はさきに立つてせつ〱と歩いて行つた。墓地へ入ると共にその足どりが快活になつたやうに、ゆみ子には見えた。

『初ちやんまあゆつくり行かうぢやないの、』



かう聲をかけようとして、ゆみ子はふとためらつた。

二人はやがて廣い墓地のずつと奥の方へと辿りついた。小高い丘の上の老松の蔭――そこに初子の母の墓があつた。

ゆみ子は隅の方へしやがんで落葉を集め、マッチをすつて火を點けた、初子は自分の家の店から一本ぬいて持つて來た線香の赤い紙をといて、くべた。

「ね、姉さん――」

何と思つたのか急に低い聲で初子は云つた。

「お母さんの一週忌にならないうちまたお母さんが來ちや、おかしくないかしら、え、姉さん？」

「そんな事ないわ。どつちしたつて同じことよ」

ずつと向ふの遠い野面を眺めながら、ゆみ子は沈んだ聲で答へた。

「さうかしら」

初子は一寸考へるやうに小首を傾けた、かと思ふとつと立ち上つて、めら／＼と紅い焔の立つ線香の束を二つに分け、一つをゆみ子の手に渡した。

冷たい土を掘つて二人は線香を墓の前に手向け、暫らくの間默つてゐた。



叔母の體はこの土の下にあるのだ！ ゆみ子は枯れた草の根を摑つて、堪えず涙含んだ。

「ゆみちやん。ゆみちやん」と何につけてもやさしくしてくれた叔母――叔母は、叔母の靈魂は、今何處に居るのであらう。

叔母が生きて居さへしたなら、たとひどんなに病ひがちだらうとも！ 従妹達は、また自分までも、どんなにか仕合せだつたらうに！

「初ちやんけふ忙しいの？ 忙しくなければ姉さんの家へ遊びに來ない？ もうあしたは歸るんだから」

立ち上る初子の何處やら淋しげな頸すぢから肩のあたりを眺めながら、ゆみ子は胸にたゝまつた感情を制へて、かう口で云つた。

「えゝ行くわ、歸りにずつと、だけれど夜は姉さんうちへ來るのよ」

初子は子供らしい笑さへ含めて、やゝ高いはつきりした聲でこたへた。

その翌日の夕、

ゆみ子は淋しい思ひで、東京へ歸る支度をした。昨日と違つて朝から曇り空の、うすら寒いいや



な日であつたけれど、歸りを延ばす氣にもなれなかつた。

充されぬ空虛な心――ゆみ子はそのまゝで歸るのだつた。それは別段今度に限つたことでもなく鄕里へ來る度にいつも味はふゆみ子の經驗なのであつた、都會の生活に疲れた荒んだ心を暫らく休めたいと思つて歸るゆみ子は、いつの時にも屹度その期待を裏ぎられた、ゆみ子の心をなごめるものは、鄕里にはなかつた。兩親や祖母の愛情を感じないのではなかつた。けれどゆみ子はそれに滿足しきれぬのであつた。骨肉間の本能的な情愛は、却てゆみ子の心を寂しくしさへした。ゆみ子の求めるのはそれ以上の人間的な親愛なのであつた。

死んだ叔母との間には微かながらもその人間的な親愛があつたのだ！　さう思ふと、思つても思つても、叔母が懷かしくてならなかつた。

はやくも金色に色づく庭の蜜柑を、ぼんやりと硝子戸越しに眺めながら、ゆみ子はしめかけた帶をそのまゝに、思ひ暮れるのだつた。

『お前がお土産は玉子だけでいゝの、今は丁度お肴のとれない時で――も少したつと蜜柑があるのだけれど』

と母は云つた。

「えゝ結構ですわ、あんまり荷物があると重くて困りますからね」
「羽織も出來て居るんだけれど——どうおした、あれを着て行くかえ」
「いゝえ、どうせお正月にはまた來るのですもの、しまつといて下さいよ」
帶止の金具をパチンとはめて、ゆみ子は母をふり返つた、母もうす寒さうな肩をすぼめて居た。
「お母さんもちと東京へお出かけなすつたらどう？」
何か云はなければ氣がすまないやうで、ゆみ子はこんなことを云つてみた。
「どうしてお前、だん／＼寒くはなるし、年のうちにいろ／＼手を廻しておかなければならないしお祖母さんだつて年とつたからね、なか／＼家はあけられないよ、お前が早く……」
云ひかけて母は言葉を呑んだ。

その母の心持はゆみ子にもよく分つてゐた、學校を卒業してからも少し語學の稽古がしたいといつて東京に止まつてゐる娘の心が、母には分らないのであつた。早く家へ歸らせて相當な養子を貰つてやつて……そして安心したいものと母は一圖に思ふのだつた。その親心に無理もないとはゆみ子も思つてゐた。けれども——けれどもゆみ子は行きかけた途を半ばで徒らに歸る氣にはなれなかつた。ゆみ子は母や祖母が謎のやうに云ふ言葉に對してもわざとそしらぬ風を裝つてゐた。そし



て心の中は苦しかつた。

「もう何時かしら、汽車の時刻におくれると――」

いひながらゆみ子は、母が其處へ置いた玉子の折を二三冊の雜誌と一緒に風呂敷へ包むのだつた。

「ぢや氣をつけてお出で、寄宿舍の先生によろしく申上げておくれ」

「だん／＼寒くなるだから風邪を引かぬやうになあ」

そは／＼と下駄をはいて門まで送つて出た母と祖母は、交る／＼かうさゝやくやうに云つた。ゆみ子は默つて頭を下げた。

「オヤゆみちやんもこの汽車ですか、ぢや一緒に行きませう」

ふとゆみ子のうしろの方にかういふ聲がした、それは松やの叔父だつた。黑い外套を重さうに着て手には商用の鞄をさげてゐた。東京へ仕入れに行くのらしかつた。

「そらあはあつれが出來ていゝ」

と祖母は云つた。

ゆみ子は叔父と、肩を並べて、歩き出した。互ひに默つてゐた。町を離れると寒い風が、袂や裾に吹きつけた。



『ゆみちやん、お母さんからお聞きでせうが……』

ふとかう云ひ出した叔父の聲にゆみ子は覺えずはつとした。叔父の調子が何となくいつもと違つて居るやうなので、直に返事も出なかつた、ゆみ子は無言のまゝ、顏をふり向けた。

『お父さんもいろ〳〵御心配下すつて、今度留守居をきめましたから……』

叔父の聲は沈んで居た、有した乞はうとするかののやうな思ひを籠めてゐた。堪へ難い寂寞に惱む人の訴へを聞くやうにも、ゆみ子には思へた。何と答へたらいゝか、ゆみ子には分らなかつた。

叔父はなほ、主婦のない家庭の困難な事情を話し出した、近所の知り合ひから頼んである女が人々の眼をかすめては家へ何かと盜み運んで困るといふ事なぞも云つた。

『それは……その方がよう御座んすわ……』

ゆみ子は口の中で微かにこんな事をつぶやく外、云ふ言葉を知らなかつた。

今ゆみ子の心には潮のやうに漲ぎるものがあつた、何かは知らぬ熱い熱い思ひであつた。この叔父に對してかりにも憎惡に近い感情を懷いた自分が悔いられた。

悄然とした姿、絞り出すやうな迫つた聲……それでもなほこの叔父を責めることが出來るだらうか？ 人間の弱さ、ゆみ子はしみ〴〵それを感じた、そして孤獨に惱まされつゝ、つひに孤獨に堪



へ得ぬ不幸な人間の運命が悲しまれた。限りなく憐れまれた。しかもその人間を憎む氣にはなれなかつた。ゆみ子は人間が――叔父が、自分が、いとしかつた。そしてこれまで知らなかつた親しい思ひが、叔父に對して、湧くのを覺えた。共に手をとつて行くべき人であつたといふ思ひがした。然しゆみ子はその自分の心を、口へ出しては、云へなかつた。ゆみ子は涙含んだ眼をじつとうつむけて歩いた。田圃はつきて二人はいつか停車場近く來て居た。停車場のシグナルは最早下りてゐた。はるか向ふの町に、少さく黑い汽車が見えた。黄昏の空には長く一條の煤煙が棚引いて、その上に一輪の銀色の月が懸つてゐた。

（四十四頁より續く）

八月八日夜。今夜十時二十分巴里へ着いた。前に宿つたコンテイネンタル・ホテルへ來た時には十一時であつた。諏訪丸は十三日マルセーユを出帆する筈であつたのが一日早く十二日と云ふことになつた。で一層忙しくなつた。明日を巴里で發し、十日にマルセーユへ行く。

八月十日。マルセーユ着。グランド・ホテル投宿。いよ／＼歐洲を去るべく、昨夜十時半此處へ來た。十二時に床へ入つて今朝五時に起きた。此のホテルには暹羅の皇帝が宿つて居る。朝早く日本領事館へ行つて領事と暫く話し合つた。佛蘭西に於けるマルセーユは英國に於けるリバプールだ。此處は多くの點に於てパリスとはまるで違つて居る。第一に市民の氣風ががさつである。

（歐洲からの最後の通信がまだある筈ですが本號が校了になるのにとう／＼參りませんでした。止むを得ず次號に讓ります。）

教育社會學講話（第十七回）

社會階級の研究

社會心の研究は、八月號を以て終りとし、本號から社會階級の研究に入らうと思ひます。けれども、本號も余白が少なくなりましてほんの僅かしか書けないことを遺憾とします。次號にこそ今から計畫して置いて充分頁をとるつもりで居ります。

階級は習慣を基礎として成り立つてゐるものである。つまり、法典が階級である。中流階級と云ふような言葉は、一定の標準の下に動作して居る人々を指示してゐる。一言で云へば、生活に對する一つの標準が階級となつてゐて、そして、其の標準は習慣なのだ。であるから、階級と云ふものに付いて判然としてゐる唯一つのものは其の法典である。とケラーは云つてゐます。

實際、上流と云ひ、中流と云ひ、勞働階級と云ひ、皆、それ〴〵の階級に屬する理想、及び、習慣に從つて生活してゐるので、其の階級と云ふものが存續してゐます。

又、ミルは申ます。一國のうちに或る一つの優勢な階級があるとすると其の國の道德の大部分は、其の階級の利益及び其の階級の感情から發生する。と。

階級は人口の層(ストレータム)であつて、其の層の各々がそれ〴〵別な社會心、つまり、階級意識と云ふものを持つてゐます。けれども、一階級が持つてゐる社會心と云ふものは其の階級が他の階級と交通することによつて變化し、發達するものだと云ふことは前々號迄の『社會心の研究』に於て述べました。それで、此の『社會階級の研究』は其の『社會心』を兩側面から研究することになります。ですから、こゝでは、一つの階級と他の階級との交通の狀態、及び、一つの階級内のより密接な交通の狀態、其處から起る階級意識を研究することになります。それから、又、交通の結果の階級意識の反動、及び、一般的社會生活にも研究の範圍を擴げて行くことになります。

階級意識と、其の階級内の親交は、漸加的に同時に働きます。其れは丁度火と火が起す氣流との關係と同じです。火力が强ければ强い程氣流が烈しくなり、氣流が烈しければ烈しい程火力が强くなると同じように。又、階級意識の强弱は其の階級が他の階級と交通する度によつて差があります。他の階級とは無關係に孤立の狀態にある階級の階級意識は强烈であるに反して、他の階級と自由に頻繁に交通してゐる階級の階級意識は其の特種な點を散漫にします。或る敎師の經驗談に次のやうなのがあります。

「私が最初奉職した處は材木伐出町であつた。であるから住民が常に替るので、其の町の階級線と云ふものが非常にゆるかつた。町へ來て、まだ、幾日もたゝない本當の新參者でも其の町で催されるどんな會へでも出席することが出來た。どう云ふ階級の人にでも自由に逢ふことが出來た。我々敎師達がいつもねんごろに歡迎される家庭がいくつかあつた。其れに反して、私が二度目に奉職した町は住民が固定して居て其の町に變化と云ふものがなかつた。町民は代々家に傳はる財産を守つてゐて、階級線が

はつきりしてゐた。故に、此の町では他國人はいつ迄も〳〵他國人として取り扱はれて居なければならなかつた。其の町へ住んで自分も其の町の一部であるような氣持になる迄には餘程の年月を費さなければならなかつた。」

階級には種類が二つあります。世襲的階級と、競爭の結果或る階級に屬するようになるのと。亞米利加では、理窟に於ては階級と云ふものが存在して居ない筈ですが、事實に於ては矢張りはつきりと階級づけられてゐて、其の最も著しいものは黒人階級です。

野球の一團のうちに一人の黒人が居たが彼は競技の度毎に白人競技者にしつこく狙はれて居て、遂ひに、其の團體から脫しなければならない程、ひどい怪我をしたとか又、或る小學校では、二人の黒人の子が白人の子と同じように毎日樂しそうに勉强をしたり遊戯をしたりして居たが、併し、白人の親達が其れを知つた時に、自分等の子供に知慧をつけたり、忠告をしたりするので、ツイには無邪氣であつた白人の子達が

其等の黒人の子を疎外するようになり、黒人の子はいつも二人ぎりでションボリして居るようになつたとか云ふ例は數へきれない程澤山あります。

勿論、白人の此の態度は今世界の非難の的になつて居るのでありますが、とにかく種族と種族との間に根本的の差があることは拒むことの出來ない事實であると同時にクーレーが階級は心理的組織だと云つたのも我々は思ひ出します。世襲と云ふことは內體的と云ふよりも社會的であります。ですから、兒童は自階級の精神を年長者から敎へられる迄は自階級と他階級との間の境線を知らずに居ます。或る階級の子供を他の階級の中で育てるならば、其の子供は以前自分が屬してゐた階級の言葉、作法、習慣などを皆失つてしまいます。

或る個人、又は、或る一家族がより高い階級に登り得た時には、往々、彼等は表面を飾り、上流の模倣をして自分の以前の身分をかくそうとします。そして、其れは成り金などに多く、殊に、婦人に其の傾向が著しいものです。中でも、娘達は上流の作

法、習慣などを學ばうとして、役にも立たないことに莫大な金と時間を無駄にしますけれども、現代生活の攪亂されてゐる狀態は女の心をも男の心をも、やゝ、引きしめつゝあります。同時に、家庭經濟及び社會科學を普及して、人生に於ける其等の浮薄な目的を捨てさせ、眞摯な生活に對する用意を青年男女にさせなければならない時と今はなつてゐます。

編輯の後

うちが女と子供ばかりであるのを氣遣つて私の良人は海の彼方から幾度も〱田舍の兄に來て居て貰へよと云ひます。それで兄はチョイ〱上京しては宿つてゐます。本號の初校が終つた時も丁度兄は茶の間でお茶を呑んでゐました。雜誌の編輯だの校正だのと云ふことに付て全く無知でゐる農夫の兄に私は見せてやるつもりで初校刷りを持つて書齋を出て行きました。けれども、兄は『フーン、これだけれごとを書くにやよツぽど夢を見たんべーな、フ、フ、フ、』と笑つて居ました。

兄の云ふ「夢」は「空想」を意味するか？「理想」を意味るすか？「れごと」と云つた意味は「たわ言」か？「理想」の表現か？トッサの場合に兄の口を衝いて出た其の言葉を私は味つて見ました。そして、其の兩方の意味がひッかゝッてゐると思ひました。が、とにかく、土を相手に一生を終始するこう云ふ氣風の兄が私にあることは、確かに私の人生觀を浮つかせない、地に足をつけてゐる原因の一つであると私は考へました。

本誌定價表

一册	金二十五錢	送料五厘
六册	前金　金壹圓四十錢	（送料共）
十二册	前金　金貳圓七十錢	（送料共）

[illegible]誌代及郵稅は前金の事[illegible]御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと[illegible]郵券代用は五厘切手にて一割增[illegible]廣告は御照會次第御相談いたします

大正十一年九月二十三日印刷納本
大正十一年十月　一　日發　行

東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京神田區仲猿樂町十七
印刷人　大杉直次郎

東京四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會社
振替東京五三六八八

